

秋の北欧で句会をひとつ

Takaki OKUBO

大久保 喬樹

バルト三国すなわち北欧バルト海に面した三つの小さな国のひとつリトアニアで開かれる俳句の祭典に誘われたのを機会に、勤務先の東京女子大学から国際学術交流費をいただいて、北欧版奥の細道と洒落込んでみた。

この祭典、正式には「第二〇回ドルスキニンカイ詩の秋と第五回世界俳句協会大会」というもので、現代俳句の雄、夏石番矢氏が俳句の世界的発展をめざし各国のハイジンたちによびかけて二年おきに世界各地で開催してきた俳句交流の催しである。私は句作についてはまったくの素人だが、比較文学者として俳句が世界の現代詩におよぼした影響というテーマに関心をもってきたことから参加したのである。

昨年九月末、日本ではまだ残暑の頃だったが、リトアニアは、さすが北欧、涼しいを通り越して震えあがるような寒さだった。総人口三五〇万人の小国で、首都ヴィルニウスも歩いてまわれるほどのこじんまりした町だが、ヨーロッパでも一、二の古さを誇る大学や厚いカトリック信仰に支えられた数多くの教会があるというように歴史と文化を感じさせ、詩の伝統も豊かで、それで今回の開催地となったのである。

日本からの一五名ほどを筆頭に世界各国から、それに地元の詩人たち総勢百名ほどの参加者がヴィルニウスと、そこから車で二時間ほどの保養地ドルスキニンカイの二カ所をめぐりながら俳句吟詠と討論を軸としてすごした一週間だったが、日本の外から垣間見る俳句の印象は多彩で新鮮だった。

行事の中心は各参加者による自作句吟詠で、荘厳な教会説教壇、風吹きすさぶ湖畔を見下ろすテラス、ボヘミアン風のカフェなどと場を変えながらおこなわれた。外国のハイクの流儀もいろいろあるが、一般的には断片的な印象をうたう三行詩といえる。今回は、それを各句それぞれ自国語、英語、リトアニア語の三通りで朗唱するのだが、ギター片手にロック歌手ばりに高唱する吟遊詩人がいるかと思うと、オペラリア風に抑揚豊かなメロディー、ドラマチックな身振り、表情まで添えて聴衆を圧倒する千両役者もいる。未知の外国語で意味はわからなくても、声の響きから詩的な感覚が伝わってくる。日本で俳句に接している時には知らなかった体験だった。

私自身はへぼ句を二、三披露したほか、俳句表現の可能性をめぐる討論に参加（内容は東京女子大学比較文化研究所年報に発表の予定）したぐらいだったが、静謐な北欧の秋の印象とあわせて心に残る旅だった。